



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第14主日 B年 (2021年7月4日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エゼキエル書 2章2—5節

第二朗読：コリントの信徒への手紙二 12章7b—10節

福音朗読：マルコによる福音 6章1—6節

## テーマ：言葉ことばを聞きく

### 三つの朗読から

第一朗読の冒頭、「ぼうとう霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たたせた。」(エゼ2章2節)は印象的です。人は自分の力で立たっているかのように錯覚しますが、実は神さまがわたしを立たせさせてくださっている。神さまの力で立たっていることに注意したいです。神さまがわたしを立たせてくださったのは、ある使命しめいを果たすためです。エゼキエルがそうであったように、わたしたち一人ひとりにも使命あつが与えられています。それは「反逆はんぎやくの民たみ」のもとへと遣つかわされるような、けつこうしんどい、辛い使命つらかもしれません。

第二朗読では「わたしの恵めぐみはあなたに十分じゆうぶんである。」(2コリ12章9節)という主の言葉しゆに注目ちゆうもくしましょう。弱よわさ、苦くるしさ、悩なやみ、欠けつぼう乏ひんこん、貧困ちよくめんに直面めぐすると、わたしたちは神さまからの恵めぐみがないかのように思おもってしまいます。しかし、わたしの弱よわさの中なかにこそ恵めぐみは輝かがやくのでしょうか。それは十字架こくごうのイエスさまとひとつに、弱よわさの点てんでひとつになることです。

福音朗読にあるイエスさまの言葉、「預言者よげんしゃが敬うやまわれないのは、自分の故郷こきやう、親戚しんせきや家族いぢの間あいだだけである」(マコ6章4節)はここに留とめておきたいひと言です。もしかしたら、人が一いち番ばん孤独こどくに陥おちいりやすい場所は家族まわの中なかかもしれません。周まわりの親したしい人が自分のことをわかわかってくくれなかつたら、どんなにかつらいでしょう。故郷こきやで受け入れてもらえないイエスさまには哀かなしみがあります。

## 説教

イエスさまの教えが「どこから」来て、イエスさまの教えは「何か」をまじめに問うとは、イエスさまの起源とイエスさまの本質を問うことになります。つまり、イエスさまが誰なのかを問うことです。先々週の福音の言葉、「いったい、この方はどなたなのだろう」(4章41節)の問いかけが、今日の福音でも響いています。しかし人々は、イエスさまが誰なのかをイエスさまの語ることばから理解しようとはせずに、自分たちの知識に頼って理解します。「つまづく」はスカンダリゾーですが(この言葉を語源にスカンダルという英語が誕生しました)、スカンダリゾーは「罨」という意味のスカンダロンから派生した動詞です。このことばは「罪に落とす、不信仰へと転落させる」という意味がありますし、さらには「怒らせる、いらだたせる」という意味にも発展します。イエスさまを自分たちの常識で割り切ろうとする人々のかたくなさや、思い込みが、つまずきの「罨」へと彼らを陥れてしまったのです。

ナザレの人々は、イエスさまにつまづきます。なぜなら、イエスさまが語ることばに耳を傾けず、自分たちの理解の範囲内でイエスさまを見ようとしたからです。

わたしたちが得ている知識や理解は、ほんのささいなものです。体験もわずかなものです。でも、知識と理解と体験が、新しいものと出会ったときに、それを受け入れるための基準となります。つまり、わたしたちはどこまでいっても自分の尺度だけで、新しいものを、新しい人を見ようとするのです。それは、自分の絶対化です。

言葉は、わたしたちを新しくしてくれます。第一朗読のように言葉は霊のごとく、その人の中に入ってくるのです。そして、その人を内側から新しくし、立ち上がらせてくれます。そして、言葉は、その人を新しい世界へと遣わしてくれます。

ナザレの人々は、イエスさまの言葉に驚きました。「どこから」、「何か」と疑問が生じてきました。それはイエスさまに近づくチャンスでした。しかし、自分たちからイエスさまから離れていきます。イエスさまが「人々の不信仰に驚かれた。」とは、言葉を信じないことへの驚きだったのです。その点で、第一朗読の反逆の民とナザレの人々は一緒です。

もし、第二朗読のパウロのように、ナザレの人々が自分の弱さを知っていたら、イエスさまの教える言葉はきっと心に響いていたはずで